

# 北海道師範塾 塾頭通信

## 「教師の道」

第938号 平成27年5月29日

### みんなの学校

「みんなの学校」というのは、5月23日までシアターキノで上映されていた映画の題名です。

この映画は、題名のとおり大阪市住吉区にある大空小学校を長期にわたり追いつけたドキュメンタリーであり、インクルーシブ教育の実践の一つの形を示しています。

登場するのは、校長先生と子ども達、そして教職員と保護者達ですが、中でも、学校経営の責任者は校長であるという事、校長の力量によって学校は変わるのだという事を強く印象付けています。

大空小学校は、2012年度（平成24年度）の児童数が約220人、各学年1クラスの学校ですが、この中に30人を超える特別支援教育の対象となる児童が学んでおり、しかも、特別支援教室を設けず、全ての子ども達が同じ教室で学んでいます。

この学校の運営の責任者が木村泰子校長先生で、彼女は6年前に本校が開校して以来校長を務めています。ですから、本校は、木村カラーで染め上げられているとあって良いでしょう。

木村校長先生は「全ての子どもに居場所がある学校」を作るという強い意思の下、教職員をぐいぐいと引っ張って行きます。

「開かれた学校」という言葉がありますが、大空小学校では、クラス担任といったような垣根を越えて、教職員全体が一つのチームとして皆で子ども達を見守っています。更に、地域のボランティアや保護者の方々が日常的に学校に出入りし、教職員と協働しながら沢山の目や手で子ども達を支えています。そのせいもあって、本校では不登校の子はいないし、逆に、他校で問題児とされ隔離されていたような子が転校して来たりします。

「全ての子どもに居場所がある学校」というのはどういう事なのでしょうか。

発達障がいのある児童に寄り添う木村校長先生



映画のプログラムから転用しました。

映画は、朝の朝礼で校長先生が子ども達に問い掛ける所からスタートします。

【校長先生】大空小学校は誰が作りますか。

【子ども達】一人一人です。自分です。

【校長先生】自分って誰ですか。自分だという人手を上げてください。

【子ども達】わーっと手を上げる。

つまり、「全ての子どもに居場所がある学校」というのは、全ての子ども達一人ひとりが主体的に参加し作って行く学校という事です。

### 障がいのある子もいない子も共に学ぶ



映画のプログラムから転用しました。

大空小学校には、突然教室を飛び出してしまふ子や授業中に勝手に行動する子等色々な子がいます。でも、この学校では、教職員も子ども達もみんなで見守ります。どんな状態の子も、それを個性として受け入れ、支え合い、誰一人として排除しない学校、これが大空小学校です。

ある時、気に食わない事があると直ぐに暴力を振るってしまう問題児が入学する事になり

学内でも議論になるのですが、木村校長先生は「じゃあ、そんな子はどこへ行くの？ そんな子が安心して来られるのが地域の学校のはず」ではないかと主張します。「全ての子どもに居場所がある学校」を作ろうという木村校長先生の意思に揺らぎはありません。実際に、この子は居場所を見つけて春には卒業して行きます。

発達障害の子を通わせている母親が、「以前いた学校では、運動靴はいつも綺麗なままだったし、鉛筆も先はとがったままだった。内の子は体育の授業にも、普段の勉強にも参加していなかったようだけれど、大空小学校に転校して以来、鉛筆の芯はすり減り、靴は真っ黒に汚れ、カバンの中は雑然としている」と喜びを以て話す言葉には、自分の子にも学校の中に居場所があるという事への喜びが溢れています。

インクルーシブ教育というのは、多様性を認める事で成り立つものです。子ども達は、互いの違いに戸惑ったり、ぶつかったりしながら、その違いを認め合い、響き合う事で成長して行くものだという事が、映像を通して確かに伝わって来ました。

(塾頭：吉田 洋一)